



研修医に学んでほしいこと

医療法人友愛会 豊見城中央病院 研修管理委員会副委員長 比嘉 盛丈



過日のWBCにおける侍ジャパンの活躍は、日本全土を一気に元気づけるような目覚ましいものであった。一人一人の選手の実力は当然鍛え抜かれたものであった。しかし、世界大会で2連覇を成し得たのは、単に侍ジャパンの選手たち個々人の能力の総和が最大だったからではなく、チームワークというか、チーム全体が目指すもの（ビジョン・戦略）が噛み合ったというか、そういう総合力なるものの比重が大きかったように感じたのは私だけではないだろう。同じような観点から考えると、よりよい医療を達成するには、複数のよい医師達が一つの目標に向かって力を集約させることが必要なのかもしれない。すなわち、病院内での医師-医師間での連携や、医師-コメディカルとの連携も重要であろうし、「診診連携」「病診連携」「病病連携」といった地域ぐるみの連携プレイもまた目標達成への鍵を握るのではないだろうか。

日本の医学部では、よい医師は心技体が備わっていると教えることが多い。その心技体を研修医らに備えてもらうために、指導医は何を伝えればよいのだろうか。まず、「技」は基本的な医学知識と技術を習得してもらうことであろうから指導医側にもさほどの迷いはないかと思う。問題はやはり「心」と「体」であろう。これらは非常に抽象的で、目標を定めにくい反面、その修得度の評価が困難であり、これらをきちんと修得しないと先に述べた連携プレイがおぼつかないものになってしまうだろう。「体」は、「自らの健康」と「態度」の両方の意味に解釈できるかと思うが、後者の観点から考える

と、時間や約束を守ること、身なりや言葉使いなどをきちんとすることなど、社会人としての基本を「接遇」のように教えるのが实际的だろう。紹介状や返書をきちんと書きあげることも「体」に含まれるだろうし、患者さんと同じ目線でしっかりとコミュニケーションがとれることも「体」に含まれるのではないだろうか。では最後に、よい医師に備わっている「心」とは何だろうか。その答えからはほど遠いかと思うが、私が個人的にイメージするよい医師像から列挙したい。まず、よい医師とは患者に対して愛情を持っており、一緒に働きたくなるような人である。その印象が生まれるのはその人がきっと、知識があり、コミュニケーション能力が高く、労苦を厭わず素早く反応し、意に沿わない仕事であっても嫌な顔せず応答してくれるからだ。また、よい医師は難しい問題や対立する意見であっても冷静に理性的に議論することができ、正しい判断を下すことができるし、リーダーとしてチームの意見を取りまとめることができる。そして時には、組織の一つの歯車として献身的に働くことができるし（よい医師は必ずしも社会的に高い評価を得ている必要はないだろう）、より大きな組織と共同して医療や研究ができる。自分の中に知識や技術や経験をInputすることだけに執着せず、他の医療者に対して今あるものを惜しみなくOutput（教育）していくことができる医師だろう。そういう他者（患者や医療スタッフら含む）に対する敬愛と奉仕の念を持ち続ける医師であることを願う「心」を、研修医には育んでほしい。



研修にあたって

豊見城中央病院 初期研修医2年目 大宜見 由奈



豊見城中央病院の研修の理念は、友愛の心で、人間性豊かな職場環境をつくり、健康づくりに寄与すること、また、地域医療に貢献することである。また、当院が参加する群星プログラムの目的は、2ヶ年の研修期間で救急医療とプライマリ・ケアを基礎とした総合診療方式の初期臨床研修を行なうことである。

研修にあたって目標とする大枠は上記のようなものであるが、1年の研修を終えた今では、医師として理念を成し遂げる以前に、医師としての根底に必要な、大きなことを学んだと考えている。

医師としての根底に必要で、2年間の研修を大きく左右するもの、それは「出会い」である。

「出会い」には様々なものがある。患者さんとの「出会い」、同期との「出会い」、尊敬すべき先輩医師との「出会い」である。

患者さんとの「出会い」。自分が医師として向き合う初めての患者さん、研修医1年目は特に、この1年間に会った患者さんは、どの方も印象に残っているのではないだろうか。まだ学生気分が抜けないうまま、「先生」と呼ばれることのプレッシャー、病室に足を頻りに運ぶことでもらった患者さんの笑顔、自信のなさから患者さんに与えてしまった不信感など、患者さんとの出会いで日々成長する自分が存在していたのではないだろうか。その中でも、前日まで元気だった患者さんの急変は、私にとっては忘れられない。何もできない無力感、どうもできなかったのかという罪悪感、しかしそのようなことがあっても、日々進まなければいけないのが医師という職業であることを痛感した。

しかし、その患者さんとの「出会い」は私の中で一生生き続けるもので、その「出会い」を胸に持ち続け、次につなげていくことが、私の使命であると考えている。

同期との「出会い」。初めて社会人として、医師として働くにあたっての同期の医師（友人）たちの存在はとても大きなものである。同じ時期に同じ経験をし、共に喜び、苦しみ、すべてのことを乗り越えてきた同志の存在があってこそ、2年間の研修は成り立つと考えている。幸いにも私の同期は、お互いがお互いを支えあい、苦しい時には誰でも手を差し伸べてくれるような人ばかりであり、本当に温かいメンバーに巡り合えたと思っている。

最後に、先輩医師との「出会い」。これこそ、今後の医師人生を左右すると言っても過言ではない、「医師像」を確立する上で大きく影響してくるものとする。

初期研修の2年間で、身近に尊敬すべき、目標とすべき医師を見つけることができれば、幸せなことであると思う。豊見城中央病院では、チューター制度を取り入れており、研修医と上級医がペアとなり、常に何でも相談できるような仕組みができています。その制度が最低限の枠組みとしてありながら、チューターの先生でなくとも、すべての医師が研修医を育てようという熱意があるのが、当院の最も魅力的なところであると考えています。

研修にあたって、研修医が上級医に求めていること、それは、病院全体での統一した研修理念に沿って研修を行ってもらうことはもちろん、勉強に関して気軽に上級医と議論できる環

境作り、そして、病院の枠を取り払って、勉学以外でも腹を割って話せるような関係性があることである。患者さんとの関わり方から始まり、上級医自身の描く理想の医師像、現在に至るまでの紆余曲折のあった経験についてなどを含め、研修医と同じ目線での会話を、研修医は上級医に望んでいると考える。この2年間で、精神的にも中身のある研修が、今後の医師人生に大きく関わってくるのではないだろう

か。上級医と研修医では研修のあり方に若干の考え方の違いは出てくると思うが、お互いの歩み寄りが最も研修に必要な要素であると考えている。

2年間の様々な「出会い」、そのすべてを肥やしにして、患者さん、同僚、上級医との関係を大事に大事にしながら、身のある濃い研修を行うことが現在の私の目標である。

お知らせ

第108回沖縄県医師会医学会総会

期 日：平成21年6月14日（日）

会 場：沖縄県医師会館

第108回沖縄県医師会医学会総会会頭

嶺井 進 先生

研修医企画ミニシンポジウム（11：00～13：00）

「よりよい後期研修をめざして ～なぜ沖縄を選んだのか？～」

特別講演（13：25～14：25）

「医療の質を測り改善する：聖路加国際病院の試み」

聖路加国際病院院長 福井 次矢 先生

一般講演【126題】（8：45～10：51）